

## 日本語のアクセント句に関する一考察 －実験群と統制群の比較実験より

### A Study on Japanese Accent Phrase Comparison of the Control Group and the Experimental Group

大山 理恵

#### 要 旨

本稿は、アクセント句に注目したプロソディー中心の音声指導が効果的であるかどうかを検討することが目的である。大山（2016）では、1クラスの指導前後のテスト結果の変化により、指導効果の有無を考察した。今回は、さらに検証を深めるために、日本語の授業2クラスを、実験群（音声指導あり＋説明）、統制群（指導も説明もなし）に分け、実験を行った。対象は、日本語の中・上級クラスの学生26名である。1コマの授業の中の一部を音声指導に充てた。指導効果を明らかにするため、①アクセント（正しいアクセントを解答）②アクセント句の知識とリスニング③イントネーション（文末が上昇か下降かを解答）④アクセント核記入（複合語）の4種類のテストを行い、事後テストと事前テストの結果を統計分析し検証・考察した。この結果、実験群と統制群の間に有意差が見られた。このことにより、アクセント句を中心にプロソディー指導を行うことが、より効果的な発音習得を導く一助になる可能性があることが分かった。

#### キーワード

日本語 アクセント句 音声分析 発音指導 プロソディー 複合語

#### はじめに

日本語教育において、音声指導に十分な時間を取るのには難しいと言われている。また、「発音は、通じれば良い」と考えている教師・学生も少なくない。しかしながら、果たしてそれでよいのであろうか。また、筆者は2015年、実験前に、発音に関する聞き取り調査を実験群と統制群の各グループに実施したが、

- ・日本人のように発音できないと、いつまでたっても同等には扱ってくれない。
- ・もし外国人だとわかるような話し方だと、知識があっても低く見られる恐れがある。
- ・初級の段階で音声指導をして欲しかった。

などの意見もあった。これらの結果からも十分な音声指導が必要だと考えられる。

多くの研究者が、音韻、プロソディーなどの体系的な発音指導を行い、それらの効果

を報告している（中川（2004）、稲葉（2004）、福井（2005）、山下（2005）、松崎（2008））。また、テキストにおいては、助詞と句に分け練習する（窪蘭 1999）ものや、②文に区切りを入れ、区切りと区切りの間の句（フレーズ）を練習（中川 2009, 2010）するもの、③名詞・形容詞・動詞・複合名詞と分けた練習のものがある。しかし、複合語や外来語のアクセントについて詳細には記載されていないものが多い。また、管見の限りでは、アクセントの音声指導は、単語（複合語を含む）単位と文章を扱った報告が多く、動詞・形容詞の派生語や、複合名詞・名詞＋助詞・助動詞等の「アクセント句」に特化した指導を行った先行研究は見当たらない。そのため、日本在住の留学生を対象に実験群と統制群に分けて学習実験を行った。実験群には、複合語、動詞・形容詞の派生語を含むいわゆるアクセント句に着目した指導をし、統制群にはしなかった。指導前後に行ったテスト結果を比較し、効果の有効性を提示する。

## 1 アクセント句の定義

アクセント句とは、アクセントによって規定されることばの切れ目（林 2012）であり、語よりも大きな発音上の単位で、日本語のイントネーションの基本的な単位でもある（前川 2012）。本稿では、アクセント句を対象として、日本語のアクセントの特徴を学習者に提示した。まず、アクセント句の概念について述べる。

この「アクセント句」の概念であるが、海外では、「プロソディックワード」として確立している。例えば、Peperkamp（1999）は、以下のように定義し、Selkirk（2008）も「prosodic word」という言葉を使用している。

- ・ The prosodic word has been defined in order to account for the non-isomorphy between morphology and phonology.

（プロソディックワードは、形態論と語形論とは同一ではないことを説明するためのものであると定義されている。[筆者訳]）

- ・ Prosodic words are typically characterized as being the domain of word stress, phonotactics and segmental word-level rules.

（プロソディックワードは、単語ストレス領域、音韻論的・単語レベルでの区分け規則を備えたものであるという典型的な特徴を持つ。[筆者訳]）

一方、日本ではこの韻律的単位の呼称は以下に示すように、研究者によって様々である。杉原（2011）は、「音調のまとまり、音調単位を「韻律語」「韻律句」「韻律節」（藤崎 1989）、上野（2003）「句音調」、郡（2010）は「音調句」、川上（1961）は「句」「句音調」の語を用いている。」と述べている。また、児玉（2007）は「音韻句」、那須（2003）は「語境界」、窪蘭（1999）は、「アクセント句」、土岐（2010）は「自立語＋付属語」・「リズムユニット」、鶴谷（2008）は「韻律語」と呼び、研究者間で定まっていなのが現状である。

本稿では、音声面からみた「アクセント句」としての分類を行うが、発音上の句切

れを採用する理由を述べる。なぜならば、統語上と発音上の句切れについては、自然談話分析でも、意味と音調のずれが見つかる（郡 2010）こともあり、統語上の句境界と韻律のずれがしばしば見られることが研究上の課題として指摘されている（前川 1999）からである。例えば、「両国の経済関係を強めた方がいいです。」の文章を統語上の文節で分けたものと、音声上のアクセント句で分けたものを示すと次のようになる。

【統語上】

両国 の 経済関係 を 強めた 方が いい です  
 ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓  
 名詞＋助詞 複合名詞＋助詞 動詞 ＋ 方が ＋ いい ＋ です（助動詞・活用形）

【音声上】

両国の 経済関係を 強めた方がいいです  
 ↓ ↓ ↓  
 アクセント句 ＋ アクセント句 ＋ アクセント句

「両国の経済関係を強めた方がいいです。」の正しいアクセント表記は上段で、学生がこの文章を読む際の一番多い例の発音は下段である。

○	りょーこくの	けいざいかんけいを	つよめたほうがいいです
×	りょーこくの	けいざいかんけいを	つよめたほうがいいです

2015 年に国内の日本語学校で学ぶ留学生 40 人に、この文を読ませ、録音をした。その結果、以下のような間違いが見られた。まず、「りょうこく」（両国）の正しいアクセント核表記は「りょーこく」である。「こーくひ」（国費）「こーくど（国土）」の発音が意識下にあるからか、「りょーこく」や、「りょうこく」のような間違いが見られる。次に、複合名詞「けいざいかんけいを」（経済関係）であるが、結合前の「けーいざい」「かんけい」とそれぞれの独立した 2 語の名詞のアクセントのまま発音、あるいは、「○○かんけい」の発音を覚えていたため、「けーいざいかんけい」と間違ってしまうことも多い。これは、「複合語名詞の場合、後部が漢字 2 字または 3 拍以上の名詞のものには、規則的な法則がある。前部のアクセントに関係なく、後部要素によってアクセントが決定する。後部が、平板型、尾高型、頭高型のものは、原則として、後部の第一拍まで高い中高型となる。（NHK 日本語発音アクセント辞典 P181）」というアクセント句の発音知識を得ていないのが原因であろう。

けーいざい（頭高型）＋かんけい（平板型）

→けいざいかんけい（○）

→けーいざいかんけい（×）、けーいざいかんけい（×）

次に、名詞＋助詞、複合名詞＋助詞の場合、一つのアクセント句になることを理解

していないと、この場合は「を」で下がるのだが、「けいざいかんけい・を」と助詞を独立した単語とみなし下がらずに、ポーズを入れ、強調して読むことが多い。助詞が出てくるたびに、ポーズや強調があると、自然な日本語発話ではなくなってしまう。初級の授業で、教師が学生に助詞の習得を促すため強調して読むことがある。それが、良いと思い込んで上級になってもそのように読む学生がいた例もある。よって、名詞+助詞、複合名詞+助詞も一つのアクセント句として捉え発音するという練習が必要であろう。

さらに、動詞+助動詞「強めた方がいいです」であるが、一段動詞（I 類動詞）「つよめる」の活用形であるため、一つのアクセント句とみなすことができる。個々の発音は、「つよめーる」「～たほーうが」「いーいです」であるため、「つよめーたほーうが」「つよめーたほーうが」「いーいです」や、「つよめーたほーうが」「いーいです」などの間違いが多かった。以下が、このアクセント句を含む文の構成要素である。アクセント句を下線で示し、上から順に、アクセント句、文、語彙のレベル（日本語能力試験を基準 N1～N4）、アクセント核、品詞、アクセント型である。

表 1. アクセント句を含む文の構成要素

アクセント句	アクセント句	アクセント句	アクセント句
文	<u>両国の</u>	<u>経済関係を</u>	<u>強めた 方が いいです。</u>
語彙レベル	N1	N3 N3	N1 N4 N4
アクセント核	りょーうこくの	けいざいかんけいを	つよめたほうがいいです
品詞	名詞+助詞	複合名詞+助詞	動詞+方が+いい+です
アクセント型	起伏型	起伏型 + 平板型	起伏型

最後に、実際の生成がどのようになるかを、OJAD（日本語オンラインアクセント辞書）の韻律読み上げチュータ・スズキクンを利用して出力したピッチパターンの図を以下に示す（図 1）。OJAD（Online Japanese Accent Dictionary）とは、国立国語研究所からの支援を受けて開発された日本語の韻律教育を強力に支援する無償のオンライン日本語アクセント辞書のことである。OJAD は、以下の 4 つの機能を持つ。（OJAD の機能説明より抜粋）

①単語を指定してアクセントを検索する機能

一般の電子化辞書のアクセント検索ではなく、用言であればその活用形に伴うアクセント変形、アクセントの揺れにまで対応してアクセントを視覚的、聴覚的、網羅的に表示。また、代表的な教科書十数冊に完全準拠。

②動詞の後続語を指定してアクセントを検索する機能

用言の様々な活用語尾が接続した場合のアクセント変化を視覚的に示す。

③任意テキストから用言を自動抽出し、活用に伴うアクセント変形を表示する機能

任意の日本語テキスト（web 上の任意テキスト）中の全ての用言を自動抽出し、それらが

活用した場合（12 基本活用）のアクセントの様子を視覚的に表にして示す。

- ④韻律音読チュータ・スズキクン 任意テキストに対して（例えば読み上げ原稿）、適切なイントネーション+アクセントパターンを視覚呈示し、また、合成音声による聴覚呈示を行う機能。

以下の図から、3つのアクセント句「両国の」「経済関係を」「強めた方がいいです」として捉えた日本語生成になっていることがわかる。

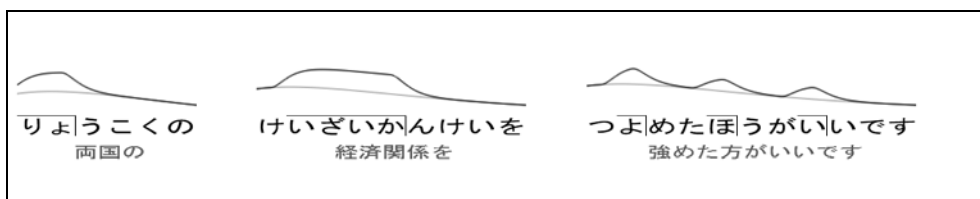


図1 OJAD（日本語オンラインアクセント辞書）を利用したピッチパターン

## 2 実験方法

国内在住の留学生を対象とし、アクセント句に注目したプロソディー中心の授業を行った。プロソディー指導の効果の有効性を明らかにするために、統制群と実験群に分け、事前テスト・事後テストを4種類行い、その結果を統計分析し比較することにより効果を検証した。

### 2-1 手続き

- ①アクセントテスト：音声を再生し、アクセント位置によって対立している二語、または二文（例：「今だ」「居間だ」）の正しい方を選択する課題（15問）のテストを実施した。以下がその内容の課題である。

1	居間だ	今だ	2	柿を買う	牡蠣を買う
3	砂糖だ	佐藤だ	4	帰る	変える
5	いっぱいの水	一杯の水	6	切手よ	切ってよ
7	厚いよ	暑いよ	8	教育	今日行く
9	買った	勝った	10	車で泊まる	来るまで泊まる
11	二時だ	虹だ	12	花だ	鼻だ
13	二本の鉛筆	日本の鉛筆	14	傘ないよ	貸さないよ
15	読んだ	呼んだ			

- ②アクセント句の知識とリスニング：使用した単語は以下の通りである。特殊拍にアクセント核があると移動するような、間違いやすい単語を選択した。また、ナイ形・バ形も学習者がよく間違える形であるために取り入れ、アクセント型においても、平板型と起伏型どちらも使用した。

## a. 一般動詞 : 辞書形、ナイ形、バ形

起伏型 3, 4 拍 (通る、わかる、申す等)、平板型 3, 4 拍 (始まる、借りる、教える等)

## b. 形容詞 : 辞書形、ナイ形、バ形 起伏型 3, 4 拍、平板型 3, 4 拍

## c. 複合動詞 : 話し合う、入りこむ 等

## d. 複合形容詞 : 薄暗い、心優しい 等

## e. 複合名詞 : 経済成長、音楽教育 等

筆者が上記の単語を元に PPT で作成したテストをプロジェクターに映して行った。

初めに、音声聞かずに提示された単語が起伏型か平板型かを解答した後、同じ単語を教師が発話し、同様に選択する課題 (34 問)。音声のあるなしでアクセント核の位置を問うものである。

## ③イントネーションテスト : 文音声を再生し、文末が上昇か下降かを解答する、以下の内容の課題を実施した。(8 問)

1	ここにあったの。	上がった ○	下がった
2	ここにあったの。	上がった	下がった ○
3	来ないでしょう。	上がった ○	下がった
4	来ないでしょう。	上がった	下がった ○
5	休みじゃない。	上がった	下がった ○
6	休みじゃない。	上がった ○	下がった
7	いいよ。	上がった ○	下がった
8	いいよ。	上がった	下がった ○

## ④長い複合名詞にアクセント核を記入させる課題 (5 問)

- ・シドニーオリンピック・イソップものがたり・インフォメーションセンター
- ・エグジスタンシャルイズム・ディインダストリアライゼーション

上記①～④の 4 種類の試験を行った。5 つの複合語を提示しそれにアクセント核を記入させる課題実施前に、アクセント核とは何か、また記入方法の知識は与えた。指導は 8 回 (各回約 20 分) に分けて行い、各回ではフレージングが図示された会話文 (ダイアログ) のあるテキストを使用し、アクセント句に着目した発音練習を行った。用いたダイアログのフレーズは単一のアクセント句で構成されていた。

実験群では、音声指導と説明を行った。統制群は、指導も知識も与えることはしなかった。

## 2-2 被験者

被験者は、日本国内で日本語を学習する留学生各 13 名 (10 代～20 代) で、実験群の国籍は、中国 (1 名)、韓国 (1 名)、タイ (2 名)、ベトナム (2 名)、スウェーデン (1 名)、マーシャル諸島 (1 名)、ミクロネシア (1 名)、インドネシア (1 名)、マレーシア (1 名)、ウズベキスタン (1 名)、アルゼンチン (1 名)。統制群の国籍は、台湾 (2 名)、中国 (1 名)、

インドネシア（2名）、カンボジア（3名）、サウジアラビア（3名）ラオス、コートジボワール（各1名）であった。日本語のレベルは中・上級、自国での日本語学習歴は約1～2年と差はあったが、日本での学習歴は10か月で、今までに、音声だけの授業を受けた経験はなかった。そのため、日本語の音声の特徴、アクセント核についての知識はなかった。

## 2-3 期間

実験群には、約1か月間、通常授業の後半部分にこの音声指導を行った。1週間に2回20分の計8回行った。統制群は、指導も説明もせず、1回目のテスト実施後、約1か月の間隔をおいて2回目を行った。

## 2-4 内容

指導目標：日本語の正しい音声知識の習得

指導内容と手順：4種類のプレテスト実施、プロソディーの重要性を認識させる（日本語のプロソディー知識）、「アクセント句」と「への字パターン」習得練習、発音練習（あいいうえおのうた、早口言葉）、発音練習（録音）、ペアー練習、グループ練習、4種類のポストテスト実施

## 3 結果および考察

### ①アクセントテスト

実験群・統制群共にプレテストで間違いが多かったのは、1居間だ・今だ、3砂糖だ・佐藤だ、4帰る・変える、11二時だ・虹だ、12花だ・鼻だ であった。しかし、実験群は知識を得、練習した結果、間違いが減った。

実験群と統制群の指導法の効果を検証するために、アクセントテストを「指導前」と「指導後」に行った。実験群と統制群に有意差があるか否かを見るために、F検定を行った。

$p = 0.71$ ,  $p > 0.01$  これにより、この2グループに有意差はないことが分かった。実験群は、指導前後のテストでは正答率は0.69から0.77に上がった（図2）。指導前の平均点と指導後の平均点の差が統計的に有意か確かめるために、有意水準5%で両側検定の $t$ 検定を行ったところ、 $t(12) = 2.48$ ,  $p = 0.028$ ,  $p < .01$ であり、指導の前後の平均点の差は有意であることがわかった。一方、統制群の正答率は、0.63から0.68へ変化したが、上昇率はわずかであった（図3）。また、有意水準5%で両側検定の $t$ 検定を行ったが、 $t(12) = 1.09$ ,  $p = .29$ により有意差は見られなかった。よって、以上の結果より、実験群の音声指導効果があったことが示された。

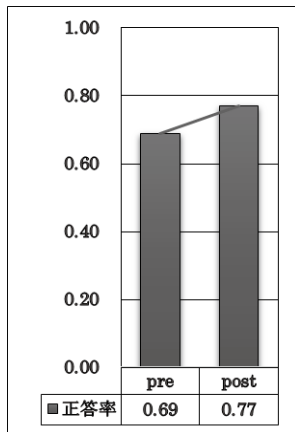


図 2 アクセントテスト結果（実験群）

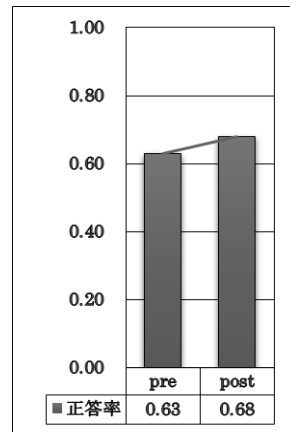


図 3 アクセントテスト結果（統制群）

## ②アクセント句テスト

実験群・統制群共にプレテストで間違いが多かったのは、初めに予想した通り、動詞・形容詞のナイ形とバ形、複合語であった。ポストテストでは、実験群は間違いが減少し、統制群は同じ間違いをしていた。

①と同様に、まず 2 グループの間の F 検定を行った結果、 $p = 0.17$ ,  $p > 0.01$  となり、有意差がないことが分かった。次に、実験群と統制群の指導法の効果を検証するために、テストを「指導前」と「指導後」に行った。実験群は、指導前後の音声ありのアクセント句テストでは正答率は 0.5 から 0.69 に上がった。音声なしの正答率は、図 4 のように、0.48 から 0.7 に上がった。実験群と統制群の、音声有り無しの指導前の平均点と指導後の平均点の差が統計的に有意か確かめるために、有意水準 5 % で両側検定の  $t$  検定を行った。実験群の音声の有り無しでのそれぞれの結果を示す。 $t(12) = 5.436$ ,  $p = 7.55E$ ,  $p < .01$ ,  $t(12) = 4.23$ ,  $p = 0.0011$ ,  $p < .01$  で、指導の前後の平均点の差は、音声あり、なしどちらも有意差があり指導効果があったことがわかった。一方、統制群は図 5 のように、音声ありの正答率は、0.5 から 0.48 へ、音声なしの正答率は、0.53 から 0.59 へと変化した。また、音声ありなしのアクセント句テストの正答率をそれぞれ、有意水準 5 % で両側検定の  $t$  検定を行ったが、音声ありは、 $t(12) = 0.22$ ,  $p = 0.82$ ,  $p > .01$ 、音声なしは、 $t(12) = 2.5$ ,  $p = 0.02$ ,  $p > .01$  となり、共に有意差は見られなかった。このことにより、指導効果がなかったことが示唆された。その他、音声あり・音声なしに関しては、音声の手がかりを追加し、情報が増えたというのに、その差はあまりなかった。これは、音声の手がかりを知識として活用しなかった可能性がある。聞き分けにおいて、音声知識の有無が大切であることが示されたといえよう。



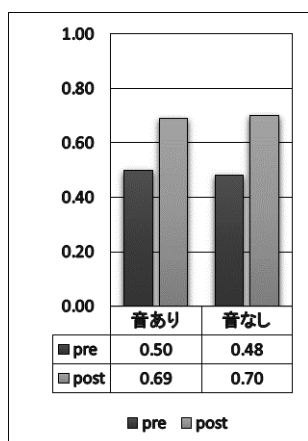


図4 アクセント句テスト（実験群）

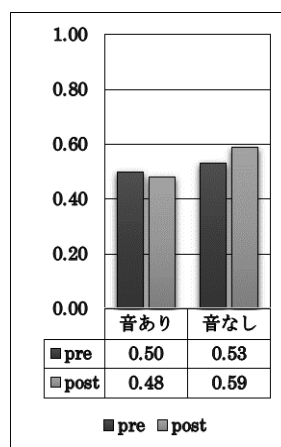


図5 アクセント句テスト（統制群）

### ③イントネーションテスト

実験群・統制群共にプレテストで間違いが多かったのは、5・6「休みじゃない」の上昇と下降、7・8「いいよ」の下降であった。ポストテストでは、実験群は間違いが減少し、統制群は同じ間違いをしていた。また、全体的に上昇の誤りは、下降に比べて少なかった。

前述のテストと同様に、まず2グループ間のF検定を行った結果、 $p = 0.94$ ,  $p > 0.01$ となり、有意差がないことが分かった。実験群のイントネーションの上昇、下降の正答率は、それぞれ、0.92 から 0.97、0.75 から 0.98 に変化した（図6）。また、指導前後の平均点の差が統計的に有意であるかを確かめるために、有意水準5%で両側検定の $t$ 検定を行った。音声の上昇、下降でのそれぞれの結果を示す。上昇は、 $t(12) = 1$ ,  $p = 0.33$ ,  $p > .01$ 、で有意差なし。下降は、 $t(12) = 3.48$ ,  $p = 0.004$ ,  $p < .01$ となり、下降は、指導前後の平均点の差は有意であり指導効果があったことがわかった。一方、統制群のイントネーションの上昇、下降、総合の正答率は、それぞれ、0.88 から 0.88、0.69 から 0.92 であった（図7）。

また、統制群にも有意水準5%で両側検定の $t$ 検定を行ったが、上昇は、 $t(12) = 8.6$ ,  $p = 1$ ,  $p > .01$ 、下降は、 $t(12) = 0.88$ ,  $p = 0.39$ ,  $p > .01$ により、上昇下降共に有意差は見られなかった。このことにより、指導がないと効果が表れないことが示唆された。また、イントネーションテストにおいては、実験群も統制群も正解率が高かった。これは、学習者にとって、最後の部分の上昇下降はさほど難しいものではなかったと思われる。実験群・統制群共に、「下降」のみプレからポストへの点数の上昇率が高かった。実験群は、「上昇」は0.05、統制群は0で、「下降」では、実験群は0.25、統制群は0.23であった。

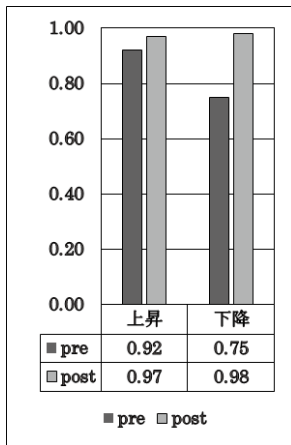


図 6 イントネーションテスト (実験群)

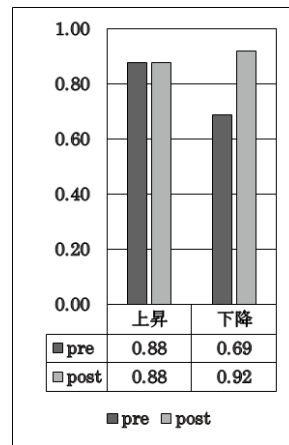


図 7 イントネーションテスト (統制群)

## ④アクセント核記入テスト

5つの複合名詞にアクセント核を記入させるテストでは、正しい位置に1か所、印を記入した場合のみ正解とし、異なる位置につけた場合、2か所以上に印をした際は不正解とした。

その結果、実験群は、プレテストの正答率は0、ポストテストの正答率は0.78となった(図8)。統制群は正答率0から0で、当然のことであるが、指導がなく、知識を与えられないと変化がないことがわかった。一つの単語にアクセント核が2つ以上あり、ピッチが上がったり下がったりすると考えてしまう間違いが多く見受けられた。実験群の $t$ 検定の結果、 $t(12) = 14.82, p = 4.47E, p < .001$ となり、有意差がみられた。プレテストにおいて、一番多くみられた間違いは、複合語の前部要素の元のアクセント核に印をつけるものであった。

また、未回答や、2カ所にアクセント核を記入する間違いも多かった。ポストテストにおいては、複合語の前部要素の最後の部分、後部要素の直前、つまり単語の切れ目に当たる位置にアクセント核を記入する間違いが一番多かった。

複合語になると、元の単純語のアクセント核が移動するという知識がないことによる間違いである。このような間違いは、複合語の発音誤りを引き起こしている一要因と考えられる。日本語のアクセント規則の中の重要な要素の一つである、「一つの単語の中で、一度下がったら二度と上がらない、アクセント核は一つ」という知識がないと、上がったり下がったりの発話を平気でしてしまうと思われる。反対に、この知識があれば、意識して発話する可能性が高くなるといえよう。

誤用例)

シドニーオリンピック、シドニー→オリンピック

イソップものがたり、イソップ→ものがたり

インフォメーションセンター、インフォメーション→センター

エグジースタンシャリズム・エグジスタンシャリズム

ディインダストリアライゼーション・ディインダストリアライゼーション、ディ  
インダストリアライゼーション

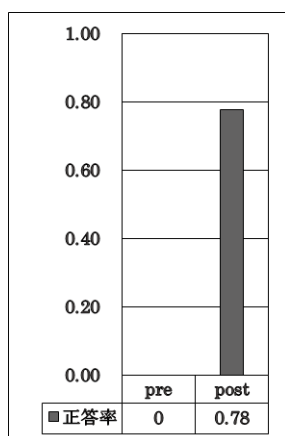


図8 アクセント核記入テスト（実験群）

#### 4 まとめと今後の課題

本稿では、「アクセント句」に注目したプロソディー中心の音声の授業を行い、実験群と統制群の指導前後の試験結果の比較により、指導効果について検証、その結果を論じた。アクセント句を対象とした音声知識を与え、プロソディー指導を実施する実験群の方が、何の音声知識も与えず、指導を行わなかった統制群より、試験結果が勝っていた。実験群と統制群の試験の有意差の有無により、指導が効果的であることが明らかになった。以下にそれぞれの実験テストについて今後の課題を述べる。

①アクセントテストにおいて、単語単独提示よりも、文中提示でのアクセント型の点の上昇率が異なっていたが、この点については、項目別評価を行い、文中で単語のアクセント型を学習する方が効果的であるか否かを検証する。

②アクセント句テストにおいて、単純語と複合語でテスト結果に差があるかどうかを、調査する予定である。今回は、間違いやすい活用形を実験対象単語にしていたが、今後はマス形など全ての活用形を対象にいれて実験を行う。これにより、学習者の苦手・得意な形は何かを実証できると思われる。音声の手がかりを知識として活用しなかった可能性があることについては、さらに検証し明らかにしていく。また、今回提示した単語は、動詞・形容詞の活用形の辞書形・ナイ形・バ形、複合名詞・複合形容詞・複合動詞であったが、活用形による間違いに相関関係があるかないか、二要因の分散分析を試みる予定である。

③イントネーションテストにおいては、正答率が高かったが、意味の違いによる「上昇」「下降」パターンが、正確にできているかどうかを次回検証する。なぜならば、単に「上

昇」「下降」が分かっただけでは、コミュニケーションにおいて有用ではないからだ。意味の違いと発話パターンが自分なりに理解できて初めて自分のものになる。よって、この点が理解できているかを図る選択肢を増やしてテストを実施する予定である。

④アクセント核記入テストにおいて、今回は主に、字から意味が判断しにくいカタカナ語を対象としたが、さらに他の複合語も加え、文章の場合はどのようなになるかも検証をしていく。

今回の実験前の聞き取り調査の結果、今まで、音声の授業を受けたことがない学生が多いことが明らかになった。また、どこにアクセント核があるか全く見当がつかない、初級の段階で教えて欲しかった、今後どのような練習をすれば良いのか知りたい等の感想を述べていた。やはり、初級の段階で、簡単な最低限のアクセント知識を導入することにより、正しいプロソディーの音声習得につながるといえよう。また、たとえ今回の実験対象者のような中上級者であっても、知識を得、自分の発話を意識して練習すれば、改善の余地があり、自然な発話が促されると考えられる。今後もさらに、効果的な音声の授業実践が行えるよう努力していきたい。

## 参考文献

- 磯村一弘 (2009) 「第2巻 音声を教える」『国際交流基金日本語教授法シリーズ』 ひつじ書房
- 稲賀敬二・竹盛天雄・森野繁夫 (2011) 『新国語便覧カラー版』 第一学習社
- 稲葉生一郎 (2004) 「複合名詞のアクセント規則とリズム指導」『言語学と日本語教育Ⅲ』 くろしお出版
- 上野善道 (2003) 「音声・音韻」『朝倉日本語講座3』 朝倉書店 pp.61-84.
- 大山理恵 (2016) 「日本語学習者におけるアクセント句の習得－音声指導を重視した授業実践の効果」『日本語・日本文化研究』 14号 同志社大学日本語・日本文化教育センター
- 川上葵 (1961) 「言葉の切れ目と音調」『國學院雑誌』 pp.62-75.
- 窪菌晴夫 (1999) 『日本語の発音教室』 くろしお出版
- 郡史郎 (2010) 「イントネーションの構成要素としての音調句」『日本語学会 2010 年度秋季大会予稿集』
- 児玉望 (2007) 「音調句と日本語韻律構造」『熊本大学言語学論集』
- 杉原満 (2011) 「音声表現から見る共通語の韻律理論」～『NHKアクセント辞典』改定に向けて～『放送研究と調査』4月号 NHK 出版
- 鶴谷千春 (2008) 『第二言語としての日本語の発音とリズム』 溪水社
- 土岐哲 (2010) 『日本語教育からの音声研究』 シリーズ言語学と言語教育 20 ひつじ書房
- 戸田貴子 (2003) 「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』 7-2. 日本音声学会 pp.70-83.
- 中川千恵子 (2004) 「上級学習者を対象としたプロソディー教育の実践」第2回『日本語教

育と音声』研究会

中川千恵子・中村則子・許舜貞（2009）『さらに進んだスピーチ・プレゼンのための日本語発音練習帳』ひつじ書房

中川千恵子・中村則子（2010）『初級文型でできる日本語発音アクティビティ』アスク出版

那須昭夫（2003）「音韻構造における構成素統御」『日本語・日本文化研究』Vol13. pp.11-28.

林良子（2012）「超分節的要素」言語聴覚士のための基礎知識『音声学・言語学』医学書院

福井喜代美（2005）「日本語学習者の複合語アクセント習得に教室内指導が果たす役割」『早稲田大学大学院日本語教育研究科音声言語コミュニケーション研究室修士論文』

藤崎博也（1989）「日本語の音調の分析とモデル化」『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻（上）』（明治書院）

前川喜久雄（1999）「韻律とコミュニケーション」『日本音響学会誌』55 巻 2 号

前川喜久雄（2012）「日本語音声学」言語聴覚士のための基礎知識『音声学・言語学』医学書院

松崎寛（2008）「複合語アクセント規則指導における効果」『広島大学日本語教育研究』第 18 号広島大学大学院教育学研究科 pp.35-41.

峯松信明（2014）「オンライン日本語アクセント辞書 OJAD の開発と利用」国語研プロジェクトレビュー voi.4 No.3 pp.174-182 共同プロジェクト紹介

森山卓郎（1997）「一語文とそのイントネーション」『文法と音声』くろしお出版

山下好孝（2005）「日本語複合語アクセント付与規則」『北海道大学留学生センター紀要』pp.79-90.

山田敏弘（2007）『日本語教師が知っておきたい日本語音声・音声言語』くろしお出版

ユーキャン日本語能力試験研究会（2011）『U-CAN の日本語能力試験徹底攻略 N1・N2 聴解練習ブック（ユーキャン資格試験シリーズ）』U-CAN

NHK 放送文化研究所編（2008）『NHK 日本語発音アクセント辞典』日本放送出版協会

OJAD - オンライン日本語アクセント辞書東京大学 <http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/phrasing>（2016 年 4 月 20 日）

Peperkamp, Sharon. (1999) Prosodic Words GLOT International 4.4 pp. 15-16.

Selkirk, E. (2008) Chapter 25. The Prosodic Structure of Function Words, Wiley online library